

第1章 「もの」と「こと」の意味論 ⑥

前おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第六節 「こと」の辞書的定義と解釈

こと[事]の意味については『字訓』（白川静、平凡社、1987年、329頁）は次のように説明しているが、これが「こと」の意に関する諸文献学者の共通分母の解釈になっていると思われるのでまず次に引用しておきたい。

「こと」は「言（こと）」であり「事（こと）」である。それで古代語の表記には「事（こと）の禁（さへ）」「事（こと）清く」のように、言と事とを区別なく同じように用いる例が多い。事（こと）と異（こと）とは、言と事のような親近の関係がないと考えられているが、それは何れも、一般を意味する「もの」に対して、特殊の立場にあるものの意である。それで事が一般化されるときには「ものごと」という。言も事も、もの一般からいえば特殊なもの、異（こと）なるものであった。ものが抽象であるのに対して、具体的なものということができる。

「もの」が抽象であるのに対して、「こと」は具体的な「もの」ということができることを説明する白川の解釈が最も簡略な両語の規範的な定義となる。しかし、この定義に使用されている後者の「もの」「こと」のやまとことばの独自性を巡って、日本語という言葉から日本精神が掘り出されてくるかという問題が、欧米思想史や文化の近代的用語翻訳のさまざまな事象「もの」が抽象であるのに対して、「こと」は具体的な「もの」ということができるかという点からも発生してくる。問題は定義に使用されている後者の「もの」「こと」のやまとことばの史的視点や、時代による変化や蒙昧性などを分析することによって、日本語から日本精神が抽出されてくるという言語学的期待が欧米思想史や異文化の近代的用語翻訳のさまざまな事象をとおしてもあらわれてくる。これらに関しては、和辻哲郎が「日本語と哲学の問題」から「こと」の意義をどのようにして捉えているかを紹介するまえに、手元にある和英や日本語の辞書が「こと」の概念をどのように苦心分類・解説しているかに目をおしておこう。

『広辞林』（三省堂、1984年）の「こと」（事）の項を見ると、（名詞）用法には、①世に現れる現象。事柄。②わざ。仕事。「一始め」。③事態。事情。「一ここに至る」。④事件。異変。大事。「さあ一だ」などと用例があげられ、（形式名詞）としては、①意味。内容。「国技といえはすもうの一だ」。②経験。「書いた一がある」。③必要。「わざわざ謝る一はない」。④うわさ。話。「よく働いたの一です」。⑤《用言の連体形について》用言を名詞化する。「歌う一が好きだ」。⑥同一であることを表し、二語を結ぶ。「山下二郎一金中川」。⑦間接に命令を表す。「花を取らない一」等に加えて、⑧《連用修飾語を作り》副詞的な働きをすることとして、古典からの引用を含めた他に「うまい一やっちゃおうぜ」などに加えて、たとえば《一志と違う》《一ぞとも・なし》《一ともせず》《一に触れて》《一も無・し》《一を・欠く》《一を好・む》《一をわ・ける》などの例をあげている。

『新和英大辞典』（研究社、1983年）の「koto」（事）の項を見ると「事」が次の9項目に分けられ、そこに該当する訳文例が挙げられている。その一端を紹介すると以下の如くである。

①[事物] a thing; [事柄] a matter; an affair; a business;《口語》a concern; [問題] a question; [事実] a fact; [ある事] something. などと、まず日本語に対応する英単語が挙げられ、関連文章や句が三十数例種にわたって紹介されている。たとえば、恐ろしい「こと」～ a thing terrible; 不愉快な「こと」～ an unpleasant matter 等々おなじようなやり方が以下⑨項目にわたって延々と続くのであるが、やまとことばである「こと」の概念の意味の蒙昧さ加減を意識していただくために、数種の例文をのぞいて代表的な名詞訳語だけを挙げておく。連用修飾語をつくる「こと」などについても、英文では主語に性別がないので翻訳は不可能であろう。

②[事情・場合] circumstance; details; particulars; [事態] things; [場合] a case.

③[事件] an incident; an event; a happening; an occurrence; [変わった事] an adventure; a happening; [事故] an accident; a mishap; mischief.

④[仕事・任務] a business; a task; a duty.

⑤[原因・理由] a cause; a reason; account; (a) provocation.

⑥[経験] an experience. 「京都に行ったことがありますか。」 Have you ever been to Kyoto?

⑦[価値] 「来ただけの～はある。」 After all, they haven't come here in vain.

⑧[一大事] 「さあ～だ。」 This is serious.

⑨ Particle 「いいにおいだ～。」 How lovely it smells.

以上の現代使われている各種辞典による「こと」という言葉の解釈の原型は、古語から展開してきた概念に由来しているので、参考に古語における「こと」の定義と数種の古典凡例文章を引用しておこう。

『角川・古語大辞典』の「こと【事・粹】」は、「行動や作用の結果として実現する具体的な事象。名詞から抽象される「もの」、形容詞や形容動詞から抽象される「さま」に対して、動詞の表す内容から抽象される、「もの」の働きや、「もの」と「もの」との関係から構成される事象を表す。言語の意の言（こと）と同音であるが、もとの二つは一連の語で、「言」として表現された結果、「事」として表現するという言霊（ことだま）の思想に支えられているといわれる。実質的な意義を伴って広く用いられるが、句の形で表された内容に体言の資格を与える形式名詞としても、もつとも基本的な語である」とし、①人間のなす行為、②世の中に起る出来事、③世の成り行きや個人の運命に重大なかかわりを持つ事件、④食事、後世は、ことに僧の夜食をいう。⑤形式名詞等に分類して、それぞれ万葉集など数多くの古典からの使用例を選別引用し解説している。たとえば①については、「さきむりに立たむ騒ぎに家に妹がなるべき己等を言はず来ぬかも」（万葉・四三六四）、②については、「ときはなすかしくもがもと思へども世の許等なればとどみかねつも」（万葉・八〇五）、③については、「今はの夕べ近き末に、いみじきことの閉ぢ目を見るに」（源氏・幻）、④については、「いびぎの人はいとく起きて、かゆなどむつかしき事どもをもてはやして」（源氏・手習）、⑤については、「うつくしき事限りなし」（竹取、「夕を待つ事なし」（方丈記）のような数多くの類似形容詞文例が挙げられている。